
亮平の玩具（番外編集）

クロウサギ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亮平の玩具（番外編集）

【Nコード】

N4455M

【作者名】

クロウサギ。

【あらすじ】

「亮平の玩具」の番外編集。亮平と達也のその後、順平と美樹が付き合ったわけ、亮平がなぜ教師を目指していたか、など亮平の玩具の番外編集となっています。一応、本編を見てない人でも、楽しめるように努力しています。ぜひ読んでください。

く順平の心、ありきたりのシチュエーションく(前書き)

本編ではゲイとしての登場だった順平。

なぜゲイな筈の順平は、最後に美樹と付き合っていたのでしょうか？
その謎(?)があかされます！

「順平の心、ありきたりのシチュエーション」

「順平。待ってよ。」

俺のとなりには、小さい頃から彼女の姿があった。

「順平ってば、聞いているの？待ってよお。」

息を切らす彼女。

俺は、彼女に意地悪をするのが大好きだ。

「早くしろよ。おいていくぞ。」

「ちょ、ちよっと待ってよ！」

彼女の名前は信濃美樹。

俺の幼馴染だ。

家もお隣さんで、母親同士が幼馴染ときてる。

そのせいか、生まれたときから俺と美樹はずっと一緒だ。

俺の隣に、美樹がいなくなったのは、小学校4年生になった時からだ。

可愛い美樹は、女子から訳のわからない痛い目線を浴びるようになっていた。

「●●君に色目つかうな。」だとか、美樹には身に覚えのない名前が女子からあがってくるそうで、俺は美樹が女子に囲まれているときは、常にたすけていた。

だけど、そんなある日。

「順平。もお美樹に構わなくて良いよ。」

「え？」

いつものように、一緒に帰ってるときの事だった。

「美樹、今好きな人いるんだ。順平を好きって疑われたら嫌だし。」

「何？ソレ。美樹の好きな人って誰？」

「…大橋先生ッ」

美樹の口からでてきたのは、担任の美形の先生の名前。

「先生？無理にきまってるじゃん。歳がはなれすぎだよ。」

「良いのっ！とりあえず、美樹に構わないでね。」

そう言って、走り去った美樹の背中。

美樹は泣いていた。

俺はそんなに邪魔だったようだ。

自分の気持ちに気がついた瞬間の失恋だった。

高校に入って、俺は美樹以外の奴に惹かれた。

一目惚れだった。

同じクラスの相馬達也。

人目を惹く顔立ちをしていた。

肌も女子みたいに綺麗で、ワックスで盛った茶髪の髪は、柔らかそうで俺の頬を赤くさせた。

「なあ…、木下だっけか？」

「えっ、あ。うん。」

不意打ちだった。

前の席だった相馬達也は、授業中、急にふりむいて俺の目を見据えた。

誰とも話さない、暗そうな相馬。

そんな相馬の声を、まともに聞いたのは俺が初めてだったんじゃないか？

「消しゴム借りる。」

「は？」

それは、貸してではなく借りるだった。

俺に拒否権はないようだ。

その日から、俺と相馬は仲良くなった。

「おい、木下？」

「んっ？何。」

「馬鹿かおめえは。これ、違うぞ。」

授業中、俺のノートを見て、急に指をさす。

数学の計算の間違いを指摘された。

「え。」

相馬は、顔も良く、スポーツもでき（部活はいつてるやつには負けるけど）、頭も良い。

完璧な奴だった。

その綺麗な顔に女共も惹かれていた。

相馬は付き合ったり別れたりを繰り返していた。

告られたら、とりあえず付き合う。みたいな。

ただ、それが遊びでしかないのは俺はわかっていたし、そのうち女達もわかって傷ついていった。

「お前は好きな奴いないの？」

「…いるよ。けど、どこに居るかわかんねえ。」

そう言った相馬はなんだか辛そうだった。

相馬の好きな奴が誰か分かったのは、2年に進級したときだ。

美樹と同じクラスになっちゃって、ちょっと落ちていたとき、そんな時に失恋した。

保健養護の教師、原田が俺等の学校に来て、女子がキャーキャー言っていた。

相馬は、泣きそうな顔で、原田を睨んでいた。

着任式が終わって、保健室に向かった相馬に、俺は付いて行った。その時の会話で、相馬が原田を好きだってわかった。

2度目の失恋。

俺は、原田が嫌いになった。

達也を犯した。

いや、正確には犯しかけた。

美樹が勝手に達也に俺の気持ちをバラしたから、その腹癒せに美樹が欲しがっていた達也の初めてを貰うことにした。

俺は、達也のお茶に媚薬をまぜた。

達也は本当に初めてだったみたいで、泣いて嫌がった。

そんな達也を可愛いと感じた。

俺は、自分が歪んでることに気がつく。

いや、そんなことはないのかもしれない。

だけど、達也がまっすぐすぎて、自分がゆがんでる気がした。

そんなまっすぐな筈の達也が、原田を忘れるために、俺を利用した。

「友達として好き。」そう言ってくれた達也の事が、俺も好きだった。友達として。

俺は違った。

達也が好きだった。

達也には人をひきつける何かがあったんだ。

だけど、それは過去の話。

俺は、その時点で、達也のことを友達として好きだった。

だって俺は…。

「美樹、好き。」

「え？何、急に。」

自分の気持ちに気づいた俺は、美樹を呼び出して、何気に初めての告白。

美樹は驚いていた。

「俺、小4のときに、美樹に突き放されてから、ズット美樹が好きだったんだ。達也も好きだけど、美樹に対する好きと、達也に対する好きの大きさは全然違うんだ。…付き合ってくれませんか。」

「じゅ、順平…、別に嬉しくなんてないんだから！ずっと、ずっと、美樹も達也好きだったけど、でも…、本当は順平に嫉妬して欲しかったとか…あり得ないし！」

「はあ…。」

俺は、はじめて美樹が好きな奴にはツンデレだって知った。

「順平。」

「うん？」

何気に初デートで遊園地に来ていた俺と美樹。

夕方、観覧車にのろう、といわれて乗った矢先、美樹が俺の名を呼んだ。

「順平…。」

「ん？」

「…好き。」

「う…ん。」

赤面する俺。

なんだか、余裕がない。

「順平は、美樹をずっと好きでいてくれる？」

「ううん。」

「ヘッ？」

美樹の目に涙が浮かぶ。

「俺は、一生美樹を愛すよ。」

「なっ、なによぉ！美樹だって、愛してやらないこともないよ！」
観覧車の頂上。

プロポーズに近い、愛の告白。

ありきたり過ぎるシチュ。

俺は美樹には初めてのキスをした。

く順平の心、くありきたりのシチュエーションく（後書き）

評価・感想いただけるとたすかります。

読んでいただき、ありがとうございました。

く亮平の思い、失われた愛の記憶く（前書き）

うーん…

ぐだぐだ。

でも亮平の思いがかけたと思います…。

〈亮平の思い、失われた愛の記憶〉

「好き。」

頬を赤らめて、俺の愛おしいアイツはそう言う。

俺が子供の頃から好きだったアイツに、告白されるなんて思ってもみなかった。

正直嬉しいけど、素直になれないからこう言うんだ。

「子供の台詞ですねー。」

馬鹿野郎っ。

心の中で、自分を殴る…なんて事ができる訳もない。

「じゃあさ、亮平はどう思ってたの？」

「…好きですよ。」

「…耳貸して。」

…????

言われるがままに、奴に耳を傾ける。

「俺は、愛してるっ。」

完全に負けだ。

まだ高校2年生のアイツに、俺は余裕がない。

「じゃあ僕は、心の底から愛してます。」

チュンチュン…

朝、カーテンからは朝日がこぼれる。外からは小鳥の囀りさえずりが…

またあの夢だ。

俺が失ったと思われる記憶は、幼馴染であり生徒である相馬達也の事だけ、と言われていた。

確かにその筈だった。

なのに、まだもう1人忘れてる気がする。

記憶が失われる以前、俺が愛していた人物。

学校だった。

この夢を見はじめた頃は、新見先生かと思っていたが違う。新見先生の口調じゃない。

では、ただの夢なのでは…？

そうも考えた。

しかし、違う。直感でわかる。

アレは夢ではない。

実際にあったことだと。

夢ではなく、記憶だと。

俺は一体、誰を愛していたのだろう。

新見先生を好いていたのは覚えている。

しかし、愛していたことは1度もない。

なのに、なぜ結婚しようとしたのだろう…。

何かから逃げようとしていた気がする…。

わからない、分からない。

「原田あゝ、腹痛い。」

「嘔吐かないでください。」

「あ、バレた？」

その日の、5時限目。

俺の記憶から消えた、謎多き人物、相馬達也が保健室へサボりに来た。

いつもそうだ。

「昨日寝てないんだよねー。ベッド借りるね。」

「またですかあゝ？昨日も言いましたけど、高校生なんですから、最低8時間は寝なさい！！」

「はあ…、またソレ？良いじゃん別に。」

「良くないです。自分の事は大切にしてください。…って、もう寝てる？」

「寝てる。」

…寝てないじゃん。

「あー、このベッド落ち着く。」

「そういえばいつもそのベッド使いますよね。3つもあるのに…。」

「んー、何となく？」

「…」

何となく…ねえ。

なんだろう、絶対になにかあるよな。
気になる。

「今、授業なんですか？」

「古文。」

「文系苦手なんですか…？」

「んー、苦手…でもないな。ただ、理系の方が得意。」

「理系好きなんですか。」

「…好きではないよ。」

好きじゃないのに得意ってどうゆう意味だ？
勉強しまくったって事か？

「好きじゃないのに得意なんですか？」

「うん…。」

あれ…。

なんか理由聞いたらマズイ雰囲気…？

コンコン

扉を叩く音がしたと思うと、相馬君の友達の木下君が入ってきた。

「失礼します。」

「おっ、お迎えがきましたよ、相馬君。」

木下君が保健室に来たときは、決まってお迎えということを、俺はもう知っていた。

「いや、今日は迎えじゃねえんだよ、原田。」

「？体調不良ですか？」

「んー…、寝不足。」

「2人して何してるんですか…」

…2人して。

いや、別に一緒に居たわけじゃねえよな。

この2人ってノーマルだよな。

いや、でも…

相馬君って彼女居ないし…

いや、告られてんのはいっぱい見てるんだけどね。

でも木下君は彼女いるかも…

わかんない。

木下君の事なんて、相馬君の友達って事くらいしか知らないな…。

相馬君のことなら、わかるのに…。

……なんで？

なんで俺、相馬君の事知ってるんだ？

過去の事は分からないけど、今の事ならほとんど分かる。

なんで？

「原田っ。聞いている？」

「えっ…」

「聞いてねえし。」

気がつくど、呆れた顔をした相馬君が目の前にいた。

「す、すみません。なんですか？」

「だからあ、俺戻るから、順平よろしくつつてんの！」

「あ、はい。」

保健室から相馬君が居なくなるのが、少し寂しい。

そう思うのはなんで？

いや、確かに俺はゲイだけどさ。

相手幼馴染だぞ？生徒だぞ？

「原田…」

「なんですか？」

木下君いたの忘れてた。

「まだ…達也の事、思い出せねえの…？」

「ああ…まあ、そうですね。」

「…達也、最近辛そう。」

それは俺もわかっていた。

寝不足だと言って彼は保健室へ来る。

話を聞くと、不眠症だと分かった。

不安や、ストレスや、辛いことがある精神的なものだとも分かった。

「心当たり…あんだろ？」

「え…？」

いやいや、俺に言われても。

「お前だよ。」

「…どうゆう意味ですか？」

「最初は達也だって頑張ってた。だけど、お前に会うたびに、辛いんだと思う。だけど、会いに行っちゃうんだよ。アイツは。」

「…？それは…僕が彼の記憶をなくしているからですかね？」

「うん。」

「でも、彼は記憶を取り戻して欲しくないと言っていましたよ？」

「そんなのっ…」

木下君は寝ていた体を起こし、俺を睨みつけて怒鳴った。

「そんなの本心な訳ねえだろッ！！馬鹿か、お前！」

俺は、ズット相馬君を目で追ってる。

ヤバイ。本^{まじ}気で好きだ。

今日もまた、保健室のベッドでならぐっすり眠れている相馬君。

その綺麗な横顔に、俺は軽くキスをした。

「やばっ…、何やってんだ？俺。」

忘れた思い。

忘れた記憶。

それが、全部君で、俺はお前が好きで、お前は俺を好きでいたらいいのに…。

記憶が戻ったら、君を手にいれられる気がするの、気のせいなのか？

だけど、君はそんな関係を望んでいないのならば、俺はこのまま気持ち隠し通そうと思う。

く亮平の思い、失われた愛の記憶く（後書き）

亮平と達也、みごとにすれ違っています。

く亮平と達也、その後く（前書き）

亮平と達也のその後となっています。

あのまま亮平は達也を思い出せず、離れ離れになるんでしょうか？
それとも、記憶がもどるのでしょうか？

それとも、戻らないけど、また恋愛するんでしょうか？

是非、よんでください。

「亮平と達也、その後」

俺は、教師であり、幼馴染である原田亮平が好きだ。

去年までは付き合っていたのに、今は俺の事すらわからねえ。

…卒業まであと3ヶ月。

卒業したら、俺と亮平は本当に何一つかわりがなくなる。

でも…、たまに亮平の実家に遊びに行こう、亮平と一緒に。

今はもう、恋人じゃないけど、亮平には幼馴染だった記憶すら無いけど、俺達は幼馴染だ。

だから…。

「達也あー!!」

「んだよ。」

教室に入るなり、俺にベタベタしてくる順平を、俺は引き剥がした。

「美樹が全然優しくしてくれん。」

「ぶっ。…美樹ツンデレだからなあ。」

俺は大笑いしながら言う。

「俺は、本気で悲しいんだ。」

「だから、美樹はツンデレだろ？ツンの割合が多いだけだろー？」

「そうだよ、達也は分かってるね、美樹の事。」

「まあな。元カレだし。」

亮平の前で、わざと俺は美樹とイチャイチャしてみた。

「——ッ。やめろ達也。美樹に触んな。殺されたいのか？」

「！」

まじめな顔で怒った順平に、俺は少々おどろく。

少し前までゲイで、俺の事を襲ったコイツが、まさかそんなに美樹を好きだとは、思ってもみなかった。

「べっ、別に、嬉しくなんかからッ！順平なんて、大嫌いなんだからッ。別に、もっとカマって欲しいとか、寂しい…なんて、思っ
って無いんだから！」

美樹が頬を赤らめる。

「ほら、寂しいって、カマってやれよ、順平？」

「だ、だから、美樹は別にそんな事…」

反論しかけた美樹の頭を、順平は撫でた。

途端、美樹の顔がトマトみたいに真っ赤になる。

「はあゝ。これだから、最近の若者は困るぜ。」

俺はそう言って、席に着いた。

なんだかんだ、俺はあの2人が羨ましいのかな。と俺は少しだけ思う。

でも、俺は…

別に方恋で一生を終えられるのも良いと思ってる。

だって…、俺は一生アイツの玩具だから…。

放課後、保健の提出物を渡しに、保健室へ行った。

「なあ、原田あゝ。」

失礼します、も言わずに保健室へ入ると、夕日に染まった亮平のその綺麗な顔は、目をつぶっていた。

寝てるのかよ。と、心の中で舌打ち。って、子供か？俺。

俺は亮平の寝顔をジッと見つめた。

…油性ペンで顔に落書きでもしてやろーか？

俺は一人で、落書きをされた亮平を思い浮かべ、クスクスと笑った。

それにしても、本当に亮平は美形だ。

それを証拠に、女子生徒にメツチャ告られてるし。

睫毛、女みてえ。超長いな。

肌も綺麗で、唇なんて…

…唇。

俺鼓動が早くなる。

亮平の唇を触ってみると、とても暖かった。

俺はキスしたいと思う。

しちゃダメかな…。

「いやいや、ダメに決まってるんだろ、俺。」

はたからみたら、変人だ。

でもしたい。どうしても。

欲情してる…。

方恋ってきめたのに。

でもキスだし…、寝てるし…ばれないよな。

バレなきゃ良いよな。

「亮平…。」

いいだろ？

別に。

チュッ

「へっ!？」

ガバツと、不意に伸びてきた亮平の腕は、俺の後頭部にまわり、俺と亮平にキスをさせた。

亮平の舌が、俺の口の中に入ってくる。

熱くて、甘くて…。

それは久しぶりに俺の欲を満たす。

「…ん…はあっ…亮ッ…ん…」

亮平はキスをやめようとはしなかった。

…なんで？

なんで、こんなこと…？

だってコイツ、俺の事忘れてるんだろ？

「ん…ちよっ、…亮…ん…」

酸素を求めても、亮平は俺の唇をはなさない。

「…はっ…はあ。りよ、亮平…？」

「…。俺…いま…。」

やっと手を離してもらい、俺が亮平に声をかけると、亮平は驚いていた。

…自分でやったくせに。

辛くなって逃げ出そうとする俺の腕を、亮平はすごい力で掴んでとめた。

「――ッ！離セッ！！」

「逃げんなよ、お前は俺の玩具だろ…？」

「…え？」

…今、玩具って言った…。俺の…玩具って…。
なんで？

だって、記憶…。

俺の目から涙が零れ落ちた。

「何泣いてんだよ、たつ。」

「亮平！亮平！りようへー！…ぐすつ。馬鹿！…俺が、どんだけ…
どんだけ、苦しんだと思ってんだよ？…俺が、どんだけ待ったと…。
…馬鹿野郎！」

「ははは。ごめん、ごめん。…おまたせ？」

亮平が優しくそう言ってひろげた腕の中に、俺は飛び込んでわんわん泣いた。

亮平の匂い。

久しぶりの亮平の腕の中。

「一生俺の玩具。そう、言っただろ？」

「馬鹿。俺は玩具じゃねえ。人だよ。しかも、誰が…亮平の物だよ。俺は、俺だッ。」

「知ってる。達也は達也だから、俺はお前が大好きなんだよ。」
亮平はそう言って、俺に熱くて甘いキスをした。

「うん…、おかえりッ」

「ただいま…。」

俺はもう、2度と亮平を離さない。

だって俺は、亮平の玩具。

ご主人が俺を捨てない限り、俺は玩具であり続けるんだ。
だからズット俺の隣は亮平で、亮平の隣は俺なんだ。

次の日、俺は満面の笑みで保健室へ向かう。

「りょうへー！…え。」

目の前に広がる光景に俺は絶句する。

女子生徒と亮平がキスをしている。

「…。」

女は、無言で立ち去る。

亮平も、何事もなかったかのように、書類になにかを書いている。

「な、何。今の？浮気じゃん！…馬鹿！」

「チガウ。勝手にされたんですよ。馬鹿に馬鹿とは、言われたくないものですね。」

「はあー？」

俺は学生。アイツは教師。

俺は学生でアイツは成人。

俺は男で、アイツも男。

俺の悩みはこれからも尽きそうにはない。

く亮平と達也、その後く（後書き）

感想や評価など、勉強になります。
ありがとうございます。

「達也の胸のざわつき、そして魔の手」(前書き)

続編つくるので、結構テキストに書きました(笑)

これで番外編は最終回ですねえ♪

「達也の胸のざわつき、そして魔の手」

ゾワッ、と背中に寒気を感じる。

「な、なんだ？」

そう呟いても、誰かが答えてくれるハズもなく

「何が？」

と、愛しの亮平が首を傾げるだけだった。

白衣姿の亮平…

うん、良いっ。

カッコいい！

「てゆーかさ、お前さっきから話聞ってるわけ？」

「へ？あ、…ん？何？」

「…やっぱ聞いてなかったんだな。」

「あはは？」

「…」

ちよっと冷たい目線を送られる。

「だ、か、ら！家帰れつつってんだよ。」

「……………WAT？」

「…摘み出すぞ、糞餓鬼。」

「え！？つまむ？出す？何を！？キャーっ、変態っ。原田先生エツ
チィっっ」

……………えっつと、

どうやら俺は、本気で保健室からつまみ出されました。
って！

「なんでえ！？入ーれえーてえーよーっ！！」

かれこれ10分はこうして粘っているが、なかなか入れてくれない。
てゆーか、鍵閉めて籠りっ放し。

話くらい聞いてくれても良いのに！！

「なにやってんのおゝ？相馬あ？」

後ろからクラスの女子に声をかけられる。

美樹のお陰で、俺の女嫌いも直って、結構女子と会話できるようになったから、絡まれるようになった。

「聞いてよおゝ、奈美ィー！！」

「おうおう、どした？うちの可愛い弟よ。」

ふざけて俺の頭をポンポン、と軽くなでた奈美こと、本間奈美は、女友達の中で美樹以外だと1番気の許せる奴だ。

理由？

俺に下心がないから。

基本的に寄って来る女たちは、俺に気がある奴ばっか。

でも、このギャルの奈美は、彼氏持ちだし、俺を男としてみてない。弟的な目で見られている。

だから俺も、奈美のことは、姉ちゃんだと思って接してる。

「亮平が、俺をつまみ出した！！」

「ぎゃははっ。夫婦喧嘩かよっ！！」

「ひどくない？鍵閉めて籠ってんだぜ？」

俺はわざとシクシク、とワザとらしい泣きまねをしてみせる。

結構女子とふざけて遊ぶのは楽しい。

そのせいで最近俺は、なぜかタラシってあだ名がついてんだけど：

「んー、じゃあ、うちがどうにかしてやんよ！」

「えっ！まじ！？」

「まじ、まじ！おおマジ！！可愛い弟が旦那と喧嘩したって言うなら、姉ちゃん一肌脱いでやるよっ」

奈美は語尾に（笑）をつけて、保健室のドアをたたいた。

実は、数名の女子に以前、亮平との関係を聞かれたことがある。「2人できてんの？」って。

だから俺はとりあえず「幼馴染っ！」って最初は言ったんだけど、

「仲いいよね、はらりよー原亮（亮平のあだ名）の事スキなの！？」とか聞かれたから、否定すると怪しまれるかなあゝ？と思って「大好きィー」

とか言っておいた。

その女子達は”フジヨシ”ってやつらしいんだけど、いまいち良くわからなかった。

それからしばらくして、俺と亮平はデキてるって冗談が流行りました。

いえ、現在進行形で流行ってます。

亮平には怒られたけど、誰も本気にはしてないから、多分大丈夫。

「ねえ、原亮！！腹痛！！あけてえっ！！」

廊下に奈美のちよつとハスキーな声が響く。

：奈美、腹痛の人は、そんな元気な声ださないよ？

てゆーか、奈美帰宅部だよなあ？

なんでまだ残ってるんだい？

しばらくすると、ガチャリとドアが開いて、亮平が出てきた。

俺はその瞬間、亮平に抱きついた。

というか、飛びついた。

「奈美、協力アリガトー。バイバイ、またね。」

「うん、じゃねえー達也。って、うちまだ帰らないけどっ」

またもや語尾に（笑）をつけて、ギラギラした爪をつけた細い手を、俺にむけて軽く振って、奈美は階段を上っていった。

「…はあ。」

奈美が見えなくなったとき、亮平はため息をついた。

「…怒ってる？」

「怒ってないようにみえますか？」

うっ、教師モード…

怒ってる…

怒ってるんですね、先生。

「…ごめんなさい。」

「それは、何に対して謝ってるんですか？」

「…えっと、話聞いてなかったこと？」

「…はあ。」

ひえーっ!!

これ、まじ怒ってる！
だけど：

「俺、まだ亮平と居たいし…。帰りたくない。」

今日バイトねえし：

あの家に1人って：

寂しいし：

「帰れ。」

「え？」

「お前さ、自分が受験生だって自覚もってんの？」
受験生っていったって：

「俺、あたま良い。」

「俺よりも？」

「うっ…、そ、それは…」

そんな質問ずるい。

「俺を超えられるほど勉強しろよ。志望校どこだかしらないけど。」

…実は、俺の志望校は亮平の卒業した結構有名な大学。

合格率65パーセント。

かなり危ない。

けど、なんか嫌な予感っていうか：

亮平が目の前から居なくなっちゃうような感覚に陥って：

勉強どころじゃない。

…最近、亮平チョット冷たいし。

「…タツ、帰れ。」

そんなつらそうな顔されて、帰らないわけにはいかない。

俺、亮平に嫌われたくねえもん。

「わかった。」

仕方なくのそのそと家路についた俺。

このときはまだ知らなかった。

魔の手が、俺と亮平を引き裂こうとしていることを…

く達也の胸のざわつき、そして魔の手く（後書き）

これで続編

達也の支配者

に入ります（笑

別に番外編なんで

これにつながって始まるわけじゃないんだけど（笑
終わり方変ですみません：

よんで頂き、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4455m/>

亮平の玩具（番外編集）

2011年6月19日07時43分発行